

初代イギリス公使ラザフォード・オールコック 日本美術工芸品の収集者として大いに自負する

奥 正敬

はじめに

日本製品が初めて出展された第2回ロンドン国際博覧会のために日本国内で美術工芸品を収集して、イギリスに送ることになるラザフォード・オールコック (Sir Rutherford Alcock, 1809-1897) が日本の土を踏んだのは1859 (安政6) 年のことでした。彼はアヘン戦争直後から中国の福州や広東でイギリス領事を務めており、東洋の事情に精通した人物でありました。このオールコック来日の前年にイギリスはジェームズ・エルギンを全権とする使節を日本へ派遣して徳川幕府と日英通商条約を締結しており、オールコックはこの条約に基づき駐日総領事兼外交代表として着任したのでした。

彼は6ヵ月後の11月には初代の特命全権公使に昇格して約5年にわたって対日交渉に携わり、在任中の1863 (文久3) 年には幕末日本滞在記としての "The capital of the tycoon" (『大君の都』) を著すこととなります。また、退任後には "Art and art industries in Japan" (『日本の美術工芸』) など、幾つかの日本研究書を著しています。

在任中に日本国内で起こった諸事件

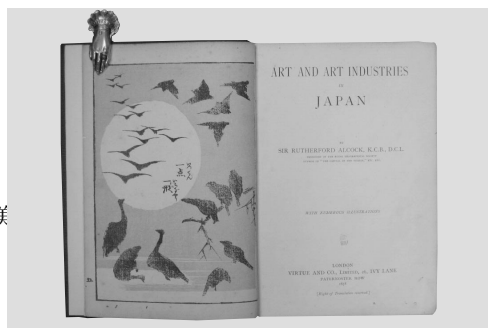
オールコックは来日して約3年の間に徳川幕府と日英外交の基盤を築き、外交官としての手腕を発揮しましたが、その後の休暇帰国中にはイギリス公使館であった高輪の東禅寺が水戸浪士ら攘夷派によって二度目の襲撃を受け、さらには御殿山に新築中であった公使館までもが炎上しています。この間、外国人が襲われることも多く、その最たるものは神奈川生麦村での薩摩藩によるイギリス人殺傷事件でした。オールコックの不在中に生じたこれらの事件は、代理公使のエドワード・ニールがインド付近まで通じていた電信と船舶を使った本国外務省の訓令に基づき、徳川幕府と交渉を進めて東禅寺事件と生麦事件の賠償交渉を纏め上げています。さらに、ニールは薩摩藩との戦いである所謂、薩英戦争を優勢のうちに終わらせ、同藩にも生麦事件の賠償金を支払わせています。

しかし、オールコックの帰任後に英仏米蘭四カ国艦隊と長州藩との間で繰り広げられた下関戦争は、遅れて戦後に届いたジョン・ラッセル外相の軍

事行動を認めないとする訓令に違反しており、1864 (元治1) 年に志半ばで本国へ召還されました。

博覧会出展のための美術工芸品の収集

このように無念な思いで退任したオールコックでしたが、在任中に本国から別の訓令を受けていました。これは日本の美術工芸品を収集することで、来たる1862 (文久2) 年に開催することが決定していた第2回ロンドン国際博覧会に出展するためのものでした。このことについて、彼が退任後の1878 (明治11) 年に記した『日本の美術と工芸』の中で、「外交官として、



“Art and art industries in Japan”
(『日本の美術と工芸』) —本学図書館所蔵—

範例とすべき日本美術および美術工芸品を手にいれるよう指示を受けた」と述べています。元々、医者として博物学を学び、公使就任後から日本語も勉強しはじめていたオールコックにとっては、学識と見識を生かす興味深い仕事であったと考えられます。事実、彼は美術工芸品の収集を人に任すことなく、自分自身で価値を厳しく吟味して見定め、さらに収集した漆器、象牙、七宝細工、甲冑、刀剣、錦絵をはじめとする絵画などの分野調査も行っています。

「日本人の名誉を傷つけない」との予測

こうしてオールコックが集めた日本の美術工芸品はロンドンへ送られ、1862 (文久2) 年に開かれた第2回ロンドン国際博覧会に出展されました。この出展については博覧会の主催者側の意向とオールコックの労によるもので、徳川幕府が正式出展したものではありませんが、偶々、同じ時期に幕府が竹内下野守を正使、松平石見